視覚障害者支援総合センター
新理事長に博松氏
「会社経営の経験生かす」

点字出版や視覚障害に関する調査などに取り組む社会福祉法人「視覚障害者支援総合センター」の新理事長に、博松（くれまつ）武男氏（69）が就任した。点字ディスプレーを作るケージーエスの元社長で、視覚障害者向けの総合イベント「サイトワールド」では仕掛け人として、力を入れてきた。「会社経営の経験を法人運営に生かしたい。社会の変化に対応し、うちでしかできないことが何かを模索したい」と意気込む。

点字ディスプレーの営業などで、欧米諸国に出張する機会が多かった博松さん。各地の福祉機器展などにも顔を出し、最新の商品情報や視覚障害者を取り巻く事情にも詳しくなった。同センターの高橋実・前理事長らと交流があり、さらにこの世界との関わりが深まった。退職を機に2015年末、センターの副理事長に就任した。

「カリスマ性のある理事長の後だから大変です。まず準備の1年に」と笑う。月刊誌「視覚障害」は7月号で350号を迎えた。視覚障害にまつわる研究などを載せる雑誌の発行は「基幹事業なので、読者を増やしたい」と語る。今月から、雑誌定期購読のオンライン書店「Fujisan」（http://www.fujisan.co.jp）にも紹介されるようにし、新しい読者の獲得を目指す。

「センターだからできることを模索したい」と話す博松武男さん

無駄の見直しも進める。先日、過去に発行した書籍が積み上げられ、部屋の一部を占領する様子を目にして驚いた。業者への依頼は相見積もりにするなど、徹底するという。

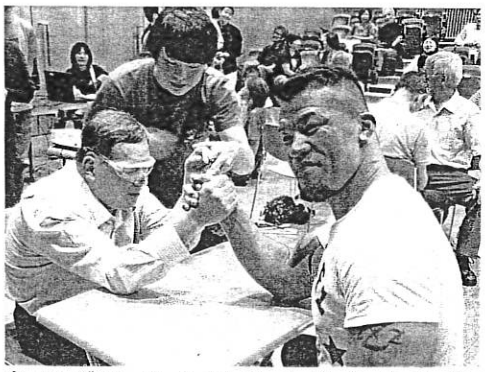
さらに、職員がそれぞれに応じた研修や、デイジー編集の講習などを受けるようにした。スキルアップは、利用者にも職員にとっても大切だ。新しい試みとしては、職員による話し合いを通じて3年程度の中期計画を作るという。「組織は自分たちが作っていくという意識を強くしてほしい」と思うからだ。

目指すセンター像を尋ねると「世のため、人のため、自分のためとなること。そのために知恵を出し、汗を流したい」と答えた。会社時代も顧客第一の姿勢で相手の話に耳を傾け、先につながるヒントを見つけてきた。「仕事は人との関わりの中でするもの。コミュニケーションを大切にしたい」と、職員が相談しやすい雰囲気づくりを心がけている。

【山縣章子】

プロレスラー・ゼウス選手と
腕相撲で力比べ
大阪 盲ろう者と交流会

大阪出身で全日本プロレス所属のプロレスラー、ゼウス選手（35）が2日、大阪市天王寺区のクレオ大阪中央で開かれた盲ろう者の交流会で生き方について語った。「1年の命だろうと、100歳まで生きることになろうと全力で生きる」との力強いメッセージに、盲ろう者や通訳・介助者ら約50人が聞き入った。講演後、ゼウス選手が「腕相撲をやりましょう」と呼びかけると、力を試そうと盲ろう男性らが挑戦していた。



がっちりと腕を組み合うゼウスさん（右）と盲ろう者の鎌田さん

ゼウス選手は、自身がオーナーのスポーツジムに聴覚障害者を受け入れている。自身もあいさつなど簡単な手話ができる。今回の講演は、いろいろな人と交流を深めたいという盲ろう者たちの招きに応じた。

身長180センチ、体重100キロ。腕回りの太さは約50センチある。そんなゼウスさんに、丸く盛り上がった力こぶを触らせてもらった盲ろう者たちは「てっきり肩に触っていると思っていた」と、驚いていた。ゼウス選手との腕相撲に挑んだ、鎌田和義さん（69、全盲ろう）は「大きくて、温かい手だった。力強くて、優しい感じがした」と話していた。

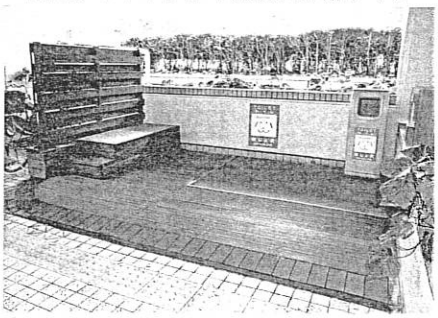
【平井俊行】

補助犬専用トイレ
設置の相談相次ぐ
協会 差別解消法が後押し

2020年東京五輪・パラを前に、補助犬専用トイレを設置する動きが広がっている。日本補助犬協会の朴善子代表理事（53）によると、企業などから設置の相談が相次いでいるという。現在、全国に約20カ所しかない。

トイレは02年の身障者補助犬法成立を機に、首都圏の空港やホテルなどに設置され始めた。昨年施行の障害者差別解消法が後押しになり、近年は商業施設など民間でも導入例が見られる。決まった基準はなく、多機能を併せ持つものから排せつ位置を区画しただけの簡易なものまでさまざま。視覚障害者向けの音声案内付きや、腐食しにくい木材を使った衛生的なものなどがある。

京王プラザホテルの補助犬専用トイレ



日本補助犬情報センターの橋爪智子専務理事兼事務局長（44）は、「長時間の外出は使用者の社会進出を促進し、トイレの存在は安心感につながる。作る時点で当事者への聞き取り調査を心がけて」と話す。一方、朴さんは「設置には一定のスペースが必要。主要駅など本当に必要な場所に設置が進まないのが課題」と指摘している。